

プログラム化した遺族ケアの例 おくやみの手紙

様ご遺族の皆様へ

様のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

不安を持ちつつ、病院から自宅へ帰ったことを喜んでいらっしゃいました。様。のことでした。上のお姉さんがいなくなって寂しい日々だったと思いますが、今は側にいかれたのですね。最期までの日々を、様に全面的に委ね、その時の準備をしながら、一生懸命生きていらっしゃいました。亡くなる数日前、ヘルパーのさんが作ったおうどんを全て召し上がられたと伺い、良かったと喜びました。

思えば約2ヶ月半という長いようで短い期間でしたが、の皆様方と共に様のケアに携われ、多くの学びをさせていただきました。そのような機会を与えてくださったこと、心より感謝申し上げます。

独居に加えて、全身の浮腫、だるさや痛み、混乱などいろいろ困難があり、正直申し上げまして私たちもどこまでできるのか不安でした。能取りをしながら私たちも何度か迷うこともありましたが、様と皆様とが選ばれたご自宅での療養を最後まで貫くことができ、悲しみの中にも今はよかったなどと言う不思議な気持ちがございます。それに家の皆様の様に対する愛情の深さ、熱意と絆の強さ、また時に応じて成長される姿をいつも感激しながら拝見しておりました。ここまでできたのはひとえに皆様方の力だと改めて思っています。

「在宅ホスピスケアこそ理想のホスピスケア」と信じて実践に励んでいるものにとって、今回の経験は大きな自信となりました。これからも微力ながら在宅ホスピスケアの普及に向けて努めたいと願っていますので、今度は私たちを声援してくださいませようお願いします。

とは申しましてあまりにも早いお別れゆえ、皆様方の心中察して余りあるものがございます。時が皆様の傷ついた心を癒してくれるものと信じておりますので、私たちの力が及ばなかった分をお許しください。

今は亡き様のご冥福をお祈りすると共に、残されたご遺族一人一人の上に天来の慰めがありますようお祈り申し上げます。

敬具
平成15年6月6日
ホームケアクリニック川越
川越 厚



拝啓 寒く折いかお過ごうか。早いもので、様がお七くになりなつて一年が経過しました。月日がつらい気持ちを癒してくれとに申しました。様がいられない寂しいはいつまでも変わらないのとは案じております。私達も変わらぬことを懐かしく思い出して、様やご家族のことを懐かしく思い出して、お祈りいたします。天来の慰めが皆様へ届きますようお祈りいたします。敬具

平成十五年二月
ボランティアグループ パリパーシオン
川越 厚

亡くなった直後の手紙

1年後に送る手紙

目標2.

時代要請に応える
在宅ホスピスケアの
提供体制を作り上げる

- 1) 家族の介護力が弱い患者のケア
認知症患者の在宅ケア
- 2) 人材の育成
(教育、研修システムの充実)

パリアンの独居患者※ (30/585=5.5%) 支援の実績

2000/7/1～06/6/30

家族の状況		人数(名)
タイプ 1 家族あり	(A)必要になったら介護をする	18
	(B)死後の手続きのみ行う	6
	(C)一切かかわりを持たない	3
タイプ 2	家族がいない	3
計		30

※在宅ホスピスケア開始時点で生活をともにする家族がいない場合

介護力の弱い在宅末期癌患者を支える知恵と力

地域の力

医療保険

医療の支援

家で過ごす末期がん患者

生活の支援

介護保険